

琴線 令和七年

森野 水琴

詠進歌
えいしんか

時を越え 天まで届け 言の葉よ
睦月の美空 夢叶いたり

初めに詠みし歌

時を越え 天にも届く 言の葉は
晴れやかなりと 夢に見るらむ
人知れず 咲く花を愛で 和む時
また逢いたしと 思う心よ

この花を 守りたいとて 通う日々
また来る春も 咲き誇らせむ

おだやかな 日ざしを浴びて 咲く花の
ほほえみを見て 心なごまむ

そよ風が 運ぶ調べに 耳を立て
より生き生きと はずむ心よ

二年ぶり 神田の神輿 担ぎ見る
みこし かつ

乙女の涙 心を洗う

わが文を ふみ 読む声を聞き 微笑みて
さらに続きを したためるかな

明け方の 忘れな草に こと寄せで

文にしたため すぐに届けむ

この声が 届けばよしと 祈りつつ
震え泣く夜の 心の響き

肌に触れたら 罪になるなら
心に触れて 愛とせよ

笹の葉が 言の葉となり ことほぎて
すみれの間にも 琴音のひびき

悩みつつ 震え泣く夜の ひとりごころ
みそひともじで つかみとるらむ

青白き 光を浴びた 切なさに
ただ泣き濡れて 想う心よ

もろともに 凛とたたずみ 光浴び
なおも進まむ たゆむことなく

令和七年 二〇二五年八月四日
松木 淑さんの『花の散るらむ』との共作
この世での 逢いし喜び たずきえて
道行きの果て 花の散るらむ

令和七年 二〇二五年八月十日
 株木 湊さんの『純情流転』との共作

暗闇に さまよう人を いつくしみ
 つひに見上ぐる 有明の月

令和七年 二〇二五年八月十五日

株木 湊さんの『純情流転』に ひびきさんが応募した歌への返歌
 応募歌
 姫百合に 糸を引かれし すがれ虫
 つひに見上ぐる 有明の月

返歌
 有明に 今ひとたびの いとなみを
 糸たぐり寄せ 続けられまし

令和七年 二〇二五年八月十五日

株木 湊さんの『純情流転』に 佐々 琴音さんが応募した歌への返歌
 応募歌
 さんざめく 波にまぎれた うたかたよ
 つひに見上ぐる 有明の月

返歌

そよぐ風 たたずむ人に 香を運び
 待つ身の思い 忘れな草に

令和七年 二〇二五年八月十五日

松木 湊さんの『純情流転』に 笹乃さんが応募した歌への返歌

応募歌

雲の間に 見えし愛しき 名を呼べば
つひに見上ぐる 有明の月

返歌

雲井との 交わす言の葉 聞きながら
なおも誘わむ わが赤糸に

青白き 光に今宵 寄り添えば
薄紫の 祈りとならむ

待つことの 長きに耐えて なおも待つ
夜もいよいよ 長くなるらむ

忍ばずに 色に出にけり この想い
青白きまで 薄紫に

茜さす 薄紫に 身を寄せて
新たな光 照らす我が身よ

文ふみを送りて 届かぬ時は

自ら走り 駆走せよ

やまとうた 下から上に 詠み上げて
新たな風を 吹きおこすかな

やまとうた ひとり浜辺に たたずみて
新たな響き 波のまにまに

うたを返すは 公家のたしなみ
震えるままに あてやかに

令和七年 二〇二五年九月八日
 杉木 湊さんの『うそつきウイルス』との共作

咲き誇る 花ながめても 夕闇の
 桜月夜に なほ春を待つ

令和七年 二〇二五年九月二十七日
 杉木 湊さんの『曇り咲き』との共作

見渡せば 風のまにまに 雲走り
 時に寄る波 この黎明に

長からむ 葦のもとにぞ 垣間見る
 素顔のままの 夜の静けさ

今宵また 忘れな草に こと寄せて
 ふみ読む月を 重ねあわせむ

夕闇に 映える翼を 並べ飛ぶ
 つがいの鳥を めでる心よ

令和七年 二〇二五年十月一日

杉木 湊さんの『曇り咲き』に 笥乃さんが応募した歌への返歌

明日を見て 仰せし暗雲 空つかむ
 時に寄る波 この黎明に

返歌
 子とともに 天に召される その命
 貫き通す もののふの道

令和七年 二〇二五年十月十八日
西令草さんの命日に詠める

ひととせの 時のまにまに したためし
文を捧げむ 天の友へと

令和七年 二〇二五年十月二十二日
今宵あなたと 逢えるのならば
かわいた心 抱かれたい

冷え込む夜に 出逢つたからは
もえる心で あたためむ

令和七年 二〇二五年十一月十日
ココア晴彦さんの『短歌』への返歌
一頁の歌

時計とは 何と不思議な ものだろう
時には支配し 時には追われる

返歌

思いわび 眠れぬ夜を 過ごしてや
まぶたに浮かべ 時のまにまに

二頁の歌

隣人の 声に亡き父 思い出し
しばしの間 考えてみる

返歌

思い出の 声にことよせ つれづれに
折にふれては ともに語れよ

三頁の歌

ココアでも 飲む？と友ら言い ぼけながら
昼寝している われ聞きにけり

返歌

うたた寝の さめた我が身に 心地よく
潤いゆくは 心の渴き

静けさに ふけゆく夜に ひとり詠む
新たな響き とわに輝け

淋しくも ときめくがまま 夜ごと舞う
朝までもとは 言うまでもなし